

伊豆文学を代表する井上靖の自伝的小説『しろばんば』『夏草冬濤』の舞台は井上靖幼少期の天城湯ヶ島、中学時代の三島・沼津です。

このゆかりの地を見渡すかの如く愛鷹山のふもとと駿河平クレマチスの丘に、井上靖文学館(↓写真左)があります。

白い純日本風の建物の周辺には竹林が密集し、クマササを両サイドに配した石段を上り詰め、門をくぐり抜けると井上靖にゆかりのある瓊花が文学館内に私たちを導いてくれます。

今日ここに訪れたのは、ここで井上文学の心に触れてから『しろばんば』の舞台である天城湯ヶ島の地に出向き、伊上洪作(井上靖)少年とその関係する人々、天城湯ヶ島の自然や地域の人々の心に触れようと思い立ち、胸を躍らせながら来館しました。



2-1

2-2

館内に入るとすぐさま目に飛び込んできたのが、あすなる(アオモリヒバ)材を使用した70cm角、高さ7mの大黒柱が展示室中央に建てられ存在感を示しています。

この展示室には、井上靖が伊豆で過ごした幼少期から最期の詩『病床日記』までの、たくさんの作品や当時の写真を見ることができます。



3-1

3-2

ガクアジサイに似た『瓊花』は特殊な香気があり香料にも使われるそうですが、今は時期を外れており、初夏に花芽をつけるそうです。

この瓊花は、井上靖先生が眠っている天城湯ヶ島町熊野山墓地に見ることができます。



4-1



4-2

井上靖の自伝的小説『しろばんば』の主人公 伊上洪作少年はこの旧三島駅(御殿場線 現長泉町下土狩駅)から両親のいる豊橋に、おぬい婆さんと出かけたり、ここから軽便鉄道で大仁駅に向かい、そこから駅馬車で故郷の天城湯ヶ島に行き来した思い出のある場所でもあります。駅前には、少年期の井上靖像(彫刻家:堤直美氏作)が設置されており、皆さんの目を引いています。井上靖生誕百年記念・洪作少年像(彫刻家:堤直美氏作)は、平成20年に除幕されています。



5-1

昔、長泉町下土狩駅は三島駅だったそうです。写真は、昭和2年当時の旧三島駅 (長泉町観光協会所蔵写真より)

しろばんばの里をたづねて



6-1



6-2

『しろばんば』の舞台となっている井上家旧居跡で、天城湯ヶ島旅館組合長の宇田さんから熱心に説明を聞く愛好者の皆さん。(写真左)
写真右は、井上家居跡裏に位置し、小説では、おぬい婆さんと洪作少年が暮らしていた土蔵がありました。洪作少年は、土蔵2階の窓口から毎日 遠くに見える富士山を眺め何を考えていたのでしょうか！



7-1



7-2

写真左は、『しろばんば』に出てくる洪作少年の遊び友達で小説の中では、雑貨屋の幸夫・浅田酒店の芳衛・桜屋書店の光一、それと亀男 皆さん集まって子供時代に しろばんば を追い掛けて遊んだ思い出話でもしているのではないのでしょうか。(写真は浅田旧酒店所蔵)

写真右は、かのさん(おぬい婆さん中央)と 井上靖(伊上洪作 前列左側)貴重な写真で上の家に所蔵されています。



8-1



8-2

写真左は、伊上洪作が友達と、そり滑りした楮人山(かんざぶと山)で、現在は樹木が茂っていますが、当時はこの山には和紙の原料となる楮が栽培されており、東京などに出荷されていたといわれています。

写真右は、天城湯ヶ島小学校校庭から眺めた富士山です。井上靖はこの校庭から眺めた富士山をこのように表現しています。

地球上で一番清らかな広場。
 北に向かって整列すると、
 遠くに富士が見える。
 回れ右すると天城が見える。
 富士は父、天城は母。
 父と母が見ている校庭で
 ボールを投げる。誰よりも高く、美しく、
 真直ぐに、天までに届けと、
 ボールを投げる。

井上 靖



[9-1](#)

なまこ壁の「上の家」(写真左)は、洪作(井上靖)の母八重(七重)の実家で、祖父文太、祖母たね、叔母のさき子などが住んでおり、土蔵でおぬい婆さんと住んでいた洪作は、土蔵と上の家の間を一日に何度も行ったり来たりし、最もよく作品に登場する場所でもあります。

写真右は、「上の家」1階で当時を偲び乍ら、地元の方々のご厚意で心温まる昼食をふるまっていたきました。

小説の中の洪作は、この「上の家」の食卓には決して座らずに、土蔵で待っているおぬい婆さんの作った食事を必ず食べていたと言われています。

洪作たちが竹箆を振り回しながら『しろばんば』を追い、湯ヶ島の野山を駆け回って遊んだ ゆかりの地を巡ることによって、美しい自然と、地域の人たちの温かいおもてなしに接することができ、小説の中に出てくる人々への見方がこの訪問によって変わってきたことは間違いありません。

あなたも、洪作少年とともに心に触れる旅をしてみませんか。

[9-2](#)



取材：沼津・北駿地区担当 生きがい特派員 渡邊英機